

平成 22 年 5 月 14 日現在

研究種目：特定領域研究  
 研究期間：2005～2009  
 課題番号：17063002  
 研究課題名（和文） 西アジア旧石器時代の行動進化と定住化プロセスの関係  
 研究課題名（英文） Relationship between the behavioral evolution and the process of  
 sedentarization in the southwest Asia Paleolithic  
 研究代表者  
 佐藤 宏之（SATO HIROYUKI）  
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
 研究者番号：50292743

研究成果の概要（和文）：西アジアにおける部族社会の形成プロセスを探るといふ本特定領域研究の共通課題を受けて、広くユーラシア全体にわたる旧石器資料の社会・文化・技術・生態的適応行動戦略の分析を行い、社会組織の複雑化に関する社会進化の先史考古学的検討を総合的に実施した結果、遊動型先部族社会とでも形容可能な分節社会は、すでに温帯地域を中心とした後期旧石器時代から存在した可能性が高いという結論を得た。

研究成果の概要（英文）：To illuminate the formation process of tribal communities in the southwest Asia as the common issue of this scientific research on priority area, through the general and comparative analyses of social, cultural, technological and ecological adaptations and behavioral strategies in the whole Eurasian Upper Paleolithic hunter-gatherers, the prehistoric archaeological research about social complexities and social evolution has been done. As a result, it is highly possible that the segmentary societies, can be expressed “mobile pre-tribal community,” were presented already in the Upper Paleolithic including the temperate zone.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2005 年度	4,700,000	0	4,700,000
2006 年度	3,300,000	0	3,300,000
2007 年度	3,300,000	0	3,300,000
2008 年度	3,300,000	0	3,300,000
2009 年度	2,900,000	0	2,900,000
総計	17,500,000	0	17,500,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学 先史学 旧石器時代 行動進化 定住化 部族社会 社会進化

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 西アジアにおける部族社会の存在は、今日見られる各種の民族問題の社会的背景を形成している。そこで、本特定領域研究では、人類社会の進化過程で出現した部族社会の

形成プロセスを解明することを目指し、旧石器時代から歴史時代にかけて担当する歴史学・言語学分野、自然環境の変遷を解明する自然科学分野等からなる研究プロジェクトを組織した。本計画研究は、その中の旧石器

時代研究班に相当する。

(2) 人類学・考古学のこれまでの定説によれば、部族社会に代表される複雑で階層化した社会の出現は、農耕開始後の新石器時代になって初めて登場すると考えられてきたが、これは農耕社会のような定住型社会を念頭に置いており、西アジアに特有な最古の遊牧社会に関する検討はほとんどなされてこなかった。

(3) 遊牧社会は遊動社会であり、定住社会が出現する以前の旧石器時代と行動戦略上共通する。さらに、ヨーロッパ等の最近の旧石器時代研究では、後期旧石器時代においても社会の階層化が出現していた可能性が指摘され始めている。従って、部族社会の出現プロセスを検討するためには、従来の平板な社会進化論に基づく先験的で機械的な操作では不十分であり、旧石器時代における各種の証拠を検討する必要性がきわめて高い。

## 2. 研究の目的

(1) 一般に、後期旧石器時代に世界規模で出現した現生人類ホモ・サピエンスは、不安定な気候変動に影響された資源構造の変動に伴い、同後半期になると、次第に各地の動植物資源に代表される地域生態に多面的かつ効率的に適合した地域社会・文化を形成し始めるので、この過程の中に、最初の部族社会の初源形態を追跡する。

(2) 西アジアにおける部族社会の出現プロセスを探るためには、西アジアの資料だけでは十分ではない。現生人類が誕生の地アフリカを脱して最初に拡散した西アジアの後期旧石器集団は、遊動型狩猟採集民であり、このうちユーラシア中に拡散する。従って、社会進化の様相を検討するために、広くユーラシア各地の後期旧石器文化を検討する。

## 3. 研究の方法

以下の方法を重点的に実施した。

(1) 先行研究の検討: 西アジア、ヨーロッパ、東アジア、北東アジア、北米等の世界各地で組み立てられつつある各種農耕民や階層化狩猟採集民等の定住化過程論、後期旧石器時代における地域社会形成論等との比較考古学的、比較民族考古学的検討を実施する。

(2) 国内及び海外の資料調査: ユーラシアの主要な旧石器時代資料の現地調査を実施する。調査の際には、出土石器資料の技術構造分析、威信財の有無と種類・内容、炉・墓等による遺跡内空間構造の分析等に注目する。

(3) 特定領域研究の共通フィールドであるシリア・ビシュリ山系の一般調査

(4) 研究成果の総合化: 各種資料調査のデータと社会進化過程論に関する理論的検討を総合し、後期旧石器時代の遊動社会における分節社会の形成プロセスに関する仮説を提起する。

## 4. 研究成果

研究の方法で述べた(1)～(4)について、以下の結論を得た。

(1) 伝統的な人類学・考古学の理論研究では、人類社会の進化に関する理論を唯物論に基づく発展段階論として理解してきた。その代表的な学説は、生産経済発展段階論とでも形容可能な学説群で、E. タイラーやH. モルガンといった人類学の創始者に始まり、H. スペンサーの社会ダーウィニズムにも通底している。モルガン学説に強く影響を受けたF. エンゲルスやK. マルクスによって一応の完成を見たこの学説では、農耕の発達による余剰生産の蓄積とその再配分をコントロールする支配者ないし支配者階級の形成という階級社会の出現に社会の分節化の始まりを見た。M. フリードやE. サーヴィス・M. サーリンズ等の新進化主義者は、農耕社会が成立する新石器時代を部族社会と定義し、旧石器社会は社会分節化が出現する以前の平等社会と見なした。

社会構造の複雑化・構造化(=階層化)を指標とするこの新社会進化論は、今日でも非常に大きな影響力を保持しているが、肝心の部族社会の成立プロセスを具体的に検討する場面においては実態が不明瞭のままであり、依然として作業仮説にとどまらざるを得ない。そこで近年では、社会の分節化の契機として、現生狩猟採集民社会等によく見られる威信獲得を目的とした儀礼行動に着目する研究が注目を集めつつある。B. ヘイデンやM. ゴドリエ等によれば、狩猟採集のような余剰を生まない低経済段階でも、エリート層やビッグマン・グレートマンと呼ばれる個人が、集団内・間の競覇的な儀礼交換をコントロールすることにより威信獲得行動を活発に行い、それを契機として社会の分節化が進展すると考えた。この祭祀統合説とも仮称できる社会階層化論の立場にたつと、新石器時代の部族社会のような社会に至る分節化のプロセスの検討が理論的に可能となる。いわば生業(生産)から儀礼(社会)に視点をスライドさせることにより、旧石器時代における社会分節化の可能性とその出現プロセスが具体的に分析可能となろう。

(2) 旧石器時代の人々は遊動型狩猟採集民であったが、ネアンデルタール等の先人類

との比較研究が進んでいるヨーロッパでは、現生人類が出現した 4〜3 万年前になると、それ以前の時代に比べて、空間や土地利用の階層的構造が飛躍的に輻轉化していることがわかっている。ネアンデルタールの段階(中期旧石器時代)では、生活上の単位集団が近接する集団と緩やかな関係性(おそらく婚姻関係を主)を有するにとどまっていたらしいが、現生人類になるととたんに複雑化した。中・大型獣狩猟を主とする広域移動型資源開発戦略を重視する寒温帯地域の現生人類の行動圏は広域化し、そのため隣接集団との同盟関係を強化することが要請された結果、生活圏・資源交換圏・通婚圏・様式圏等が重層化した空間構造を生み出していたことが、石器石材や石器型式、装飾品の材料・様式等の分析から推定されている。このような空間構造の輻轉化は、ヨーロッパに限られた現象ではなかった。同様に調査事例の蓄積している日本列島では、100〜200km 程度を単位とする地域石器群(社会)が後期旧石器時代後半期には形成されていたことがよく知られている。こうした地域石器群の構成は、基本的に後の時代にも維持されているが、後期旧石器時代末期の有舌尖頭器石器群では、北海道と本州以南のような、より広域に地域を越えた様式(社会慣習)的な差異の存在も発見されている。このような現象は、遊動型狩猟採集民による計画的行動戦略の強化に基づく階層的な社会構造出現の初期段階を示唆している可能性が高い。

東方グラベット文化に属するロシア・バイカル地方のマリタ遺跡では、偶像・垂飾等の各種骨角製の副葬品を伴った複数の墓が出土しており、シベリア各地の同時期の遺跡でも同様な発見例がある。南ドイツの後期旧石器時代初頭のオーリニャック文化を始めとして、後期旧石器時代の各文化でも、数多くの骨角製装飾品や人形・動物形骨角製偶像が発見されている。現生人類がヨーロッパ等よりもはるかに古くから存在したと推定されているアフリカでは、南アフリカ・ブロンボス洞窟等の MSA 期相当層から 7 万年前の貝製ビーズが発見されているが、最近西アジア・レヴァントのスフル洞窟からは、同様な貝製ビーズがより古い時期の文化層(10 万年前以前)から発見された。モスクワ近郊のシングル遺跡では、各種骨角製装飾品とともにマンモス牙製の槍が真っ直ぐに整えられた状態で副葬された墓が発見された。特に重要なのは、この墓から検出された 2 体の人骨が子供であった点にある。現生狩猟採集民の事例から、狩猟採集民においても狩猟に優れた狩人のようなエリートの存在がよく報告されているが、彼らは優れた技術の保有能力によって威信を獲得しているため、子供に権威がそのまま伝達されることはない。一方ス

ギールの例では、子供にもかかわらず非常に手厚い埋葬が行われており、個人的な威信の世襲的扱いがすでに存在していた可能性を示唆している。

断片的な事例であるが、これらの例からみると、旧石器時代の一部の地域では、個人の差異化や集団的アイデンティティを示唆する象徴品・物・装置(洞窟壁画等)が発生していた可能性は高い。

(3) 以上の検討から、少なくとも現生人類が加担者であった後期旧石器時代には、遊動型狩猟採集民による地域社会の形成という一定の優先的な土地利用があり、他集団との競合を避け集団的アイデンティティを維持するための儀礼や装置・慣習が存在していたと考えられる。旧石器時代には、後の新石器時代以降の部族社会を準備したようなある種の分節社会の萌芽が存在した可能性は大きいと言えよう。しかしながらその社会は、後の部族社会と比較すると、いびつで不完全な分節化にとどまっていたと考えられる。そしてその分節社会は、新石器型の定住部族社会ではなく、あくまでも遊動型の分節社会にとどまっていたであろう。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 45 件)

- ①佐藤宏之、列島における中期/後期旧石器時代移行期の石器群と竹佐中原遺跡、長野県竹佐中原遺跡における旧石器時代の石器文化Ⅱ、査読無、長野県埋蔵文化財センター、2010、365-372
- ②Sato, H. Social complexity and organization in Paleolithic of Eurasia. *AL-RĀFIDĀN*, 査読無、special issue, 2010, 21-24.
- ③佐藤宏之、東アジアにおける削片系細石刃石器群の伝播、比較考古学の地平、査読無、同成社、2010、895-904
- ④佐藤宏之、東アジアにおける前期旧石器時代から後期旧石器時代開始期までの研究の現状と展望、九州旧石器、査読無、2009、13、1-7
- ⑤佐藤宏之、東アジア型ハンドアックス石器群の展開、物質文化史学論聚、査読無、北海道出版企画センター、2009、45-55
- ⑥佐藤宏之、地考古学が考古学に果たす役割、第四紀研究、査読有、48(2)、2009、77-83
- ⑦佐藤宏之、シリア、ヤブルド第 1 岩陰出土石器群、News Letter, 査読無、13、2009、1-5.
- ⑧安斎正人、”日本人”の祖先、季刊東北学、査読無、19、2009、156-187

- ⑨安齋正人、現代人の祖先、季刊東北学、査読無、18、2009、188-217
- ⑩佐藤宏之、旧石器時代に”部族”の起源を  
探る、特定領域平成19年度研究報告、査  
読無、2009、8-10
- ⑪橘昌信、ラタムネ遺跡のアシュリアン  
石器群と東アジアのハンドアックス石器  
群、特定領域平成19年度研究報告、査読  
無、2009、10-26
- ⑫佐藤宏之、東アジアにおける後期旧石器時  
代の形成、異貌、査読無、26、2008、2-15
- ⑬安齋正人、ヒトの祖先、季刊東北学、査読  
無、17、2008、160-184
- ⑭安齋正人、景観の考古学、季刊東北学、査  
読無、16、2008、166-184
- ⑮安齋正人、デザインの考古学、季刊東北学、  
査読無、15、2008、154-174
- ⑯安齋正人、色の考古学、季刊東北学、査読  
無、14、2008、116-127
- ⑰橘昌信、第3次ビシュリ現地調査におけ  
る旧石器遺跡分布調査、News Letter、査  
読無、9、2008、1-5.
- ⑱Onuma, K. Lithic assemblages from TB75  
and TB130. *Tang-e Bolaghi*, 査読無、  
University of Tsukuba, 2008, 87-119.
- ⑲Izuho, M. and H. Sato, Archaeological  
obsidian studies in Hokkaido, Japan:  
retrospect and prospects. *Indo-Pacific  
Prehistory Association Bulletin*, 査読  
有、2007, 27, 114-121.
- ⑳Sato, H. and T. Tsutsumi, The Japanese  
microblade industries: technology, raw  
material procurement and adaptation.  
*Origin and Spread of Microblade  
Technology in Northern Asia and North  
America*, 査読有、Simon Fraser  
University, 2007, 53-78.
- 21 佐藤宏之、日本旧石器文化の課題、季刊考  
古学、査読無、100、2007、19-22
- 22 Onuma, K. et al. Proto-Neolithic caves  
in the Bolaghi valley, south Iran. *Iran*,  
査読有、44, 2007, 1-22.
- 23 佐藤宏之、遺跡立地から見た日本列島の中  
期/後期旧石器時代の生業の変化、生業の  
考古学、査読無、同成社、2006、16-26
- 24 佐藤宏之、環状集落の社会生態学、旧石器  
研究、査読有、2、2006、47-54
- 25 橘昌信、国際黒曜石サミット-石器石材  
としての黒曜石の利用-、黒曜石文化研究、  
査読無、4、2006、3-12
- 26 大沼克彦、イラン・イスラム共和国ファル  
ス県ボラギ渓谷遺跡の石器、特定領域平成  
17年度研究報告、査読無、2006、5-11
- 27 安齋正人、西アジアの旧石器時代に関する  
覚書(1)、特定領域平成17年度研究報告、  
査読無、2006、12-22
- 28 佐藤宏之、北アジアの旧石器文化-ヤクー  
ツクの資料調査-、News Letter、査読無、  
4、2006、1-6
- 29 佐藤宏之、日本列島の自然史と人間、日本  
の地誌、査読有、朝倉書店、2005、第1巻、  
80-94
- 30 佐藤宏之、北海道旧石器文化を俯瞰する、  
北海道旧石器研究、査読無、10、2005、  
137-146
- 31 橘昌信、九州島における後期旧石器時代  
成立期の地域性、考古論集、査読無、2005、  
1-16
- [学会発表] (計18件)
- ①Sato, H. et al. Tephrochronology and  
human activities of Late Pleistocene in  
Kyushu Island, Japan. *Indo-Pacific  
Prehistory Association*, 19<sup>th</sup> Conference,  
2009, 12, 5, Hanoi, Vietnam.
- ②Sato, H. Social complexity and  
organization in Paleolithic of Eurasia.  
特定領域国際シンポジウム「部族社会の形  
成-シリア、ユーフラテス川中流域の総合  
研究」、2009年11月28日、池袋・サンシ  
ャインシティ文化会館
- ③Sato, H. et al. The process of  
Jomonization: correlation between  
prehistoric human cultures and  
environmental change in Pleistocene  
-Holocene transition in Japan.  
International Symposium “Environment  
Development of East Asia in Pleistocene  
-Holocene”, 2009, 9, 15, Vladivostok,  
Russia.
- ④佐藤宏之、環日本海北部地域の後期更新世  
における人類生態系の構造変動、国際シン  
ポジウム「環日本海北部地域の後期更新世  
における人類生態系の構造変動」、2008年  
11月22日、東京大学
- ⑤Sato, H. and M. Izuho, Landscape  
evolution and culture change in Upper  
Paleolithic of northern Japan.  
International Symposium “The Current  
Issues of Paleolithic Studies in Asia  
and Contiguous Regions”, 2008, 6, 26,  
Altai, Russia.
- ⑥佐藤宏之、地考古学が考古学に果たす役割、  
日本第四紀学会シンポジウム「考古遺跡か  
ら何がわかるか?: Geoarchaeology」、2008  
年2月2日、東京大学
- ⑦佐藤宏之、聖地巡礼-ジュクタイ洞窟とデ  
イリング・ユリヤフ-、第8回北アジア調  
査研究報告会、2007年2月10日、東京大  
学
- ⑧Sato, H. Socio-ecological research of  
the circular settlements in Japanese  
early Upper Paleolithic. *International  
Symposium ” Paleolithic Archaeology in*

East Asia”, 2006, 7, 10, Jilin University, China.

- ⑨ Izuho, M. and H. Sato, Archaeological obsidian studies in Hokkaido, Japan. Indo-Pacific Prehistory Association, 18<sup>th</sup> Conference, 2006, 3, 21, University of Philippines, Manila.
- ⑩ Sato, H. A perspective on the Middle Paleolithic studies of the East Asia. International Symposium “Early Habitation of Central, North and East Asia: An Archaeological and Paleoecological Aspects”, 2005, 8, 17, Altai, Russia.

[図書] (計 10 件)

- ① Sato, H., Onuma, K. et al (eds.) Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria. *AL-RĀFIDĀN*, special issue, 2010, 262p.
- ② 大沼克彦・西秋良宏編著、紀元前 3 千年紀の西アジア、六一書房、2010、186
- ③ 佐藤宏之・稲田孝司編著、日本の考古学 第 1 巻 旧石器時代(上)、青木書店、2010、621
- ④ Sato, H., Onuma, K. et al (eds.) International Symposium “*Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria.*” Kokushikan University, 2009, 60p.
- ⑤ 佐藤宏之編著、縄文化の構造変動、六一書房、2008、210
- ⑥ 佐藤宏之編著、ゼミナール旧石器考古学、同成社、2007、230
- ⑦ 安齋正人、人と社会の生態考古学、柏書房、2007、305
- ⑧ 安齋正人、前期旧石器再発掘、同成社、2007、187
- ⑨ 安齋正人・佐藤宏之編著、旧石器時代の地域編年学的研究、同成社、2006、372
- ⑩ 佐藤宏之編著、食糧獲得社会の考古学、朝倉書店、2005、265

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 宏之 (SATO HIROYUKI)  
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
研究者番号：50292743

### (2) 研究分担者 (2005～2007 年度)

大沼 克彦 (ONUMA KATSUHIKO)  
国士舘大学・イラク古代文化研究所・教授  
研究者番号：70152204

橘 昌信 (TACHIBANA MASANOBU)  
別府大学・文学部・教授  
研究者番号：90078832

安齋 正人 (ANZAI MASAHIITO)

東北芸術工科大学・東北文化研究センター・教授

研究者番号：60114360

### (3) 連携研究者 (2008～2009 年度)

大沼 克彦 (ONUMA KATSUHIKO)

国士舘大学・イラク古代文化研究所・教授  
研究者番号：70152204

橘 昌信 (TACHIBANA MASANOBU)

別府大学・文学部・教授

研究者番号：90078832

安齋 正人 (ANZAI MASAHIITO)

東北芸術工科大学・東北文化研究センター・教授

研究者番号：60114360